02　早稲田大学大隈講堂：ランドマークが制する

（新宿区西早稲田）

早稲田大学キャンパス内から望む大隈講堂

まちなかから望む大隈講堂

次第に整えられていく眺望

□まちなかから、キャンパスから

目白台を降りていくともうそこは都電の早稲田駅だ。そして、ところどころでもう一方の早稲田の丘をみやると、大隈記念大講堂（大隈講堂）の塔が目に入る。このように、まちなかからの眺めを引き付ける建物をまちのランドマークという。

大隈講堂を始め、早稲田大学のキャンパスの建物設計を指導したのは、建築学科を創設した建築家・佐藤功一だ。彼は、都市美を追求した先駆者でもあった。

「壁の上部が街路より望み得る建物にあっては、上空に向かって突出せる塔、其の他の附加物の設けられる方が、建物の外観に変化をあらしめ、街衢に一層の美観を与える」

今や高いビルの間に隠れがちであるが、それでもなおたった一つの塔が早稲田の丘の風景を引き締めている。

また、キャンパス内では、この塔の眺めの支配力はより濃厚である。メインストリートは塔に向かってまっすぐ伸び、沿道の建物は壁面がしっかりそろい、並木も視線をまっすぐに誘う。そして、視野の中心に塔と大隈重信像が重なる。これも佐藤のコンセプトに従った、長年のキャンパス計画がつくりだした眺めである。

ヨーロッパのまちには中心に教会が立地し、そして教会の塔がランドマークとなっている。佐藤の頭の中にはそんな像が思い描かれていた。

【参考】赤尾光司ら（1999）「早稲田大学西早稲田キャンパスの景観形成過程に関する研究」日本建築学会計画系論文集、519 号、187－194 頁